

原 著

臨床基礎教育におけるシナリオベース体験実習による体験先導型学習の効果

諸富孝彦 鷺尾絢子 吉居慎二
宮下桂子 藤元政考 北村知昭

抄録 九州歯科大学歯学部歯学科生が3年次前期に履修する「歯の治療学」は、歯科保存学とほかの臨床基礎科目の統合的学修を目的として構築されたカリキュラム内の科目の一つである。歯の治療学では学修テーマごとに、予習課題の自己学習レポート提出、シナリオベース体験実習、実習内容に関する講義、技術の定着実習、そして小テストを順に実施する体験先導型学習を導入している。本研究では、臨床基礎教育における体験先導型学習の効果を検証するため、2014年度からの5年間に本科目を受講した学生を対象とし、各年度の実習最終日に実施したアンケート回答の内容を分析した。その結果、体験先導型学習を支持した学生は70.4%であり、支持理由として講義内容が理解しやすいことを挙げる学生が多かった。学生の56.2%は体験先導型教育の他科目への導入を希望していた。予習が苦痛という回答は34.6%、予習に積極的に取り組めたという回答は52.8%、予習により疑問を自身で解決できるようになったという回答は31.2%であった。一方で、講義以外でも自分で学習する習慣が身についたと回答した学生は26.2%であった。予習用教材は成書、次いでインターネット上のウェブサイトという回答が多かった。以上の結果から、臨床基礎教育における体験先導型学習は、適切な自己学習方法の指導など改善の余地があるものの、学生の能動的な学修への参加を促し、教育効果を向上させることが示唆された。

キーワード 体験先導型学習、シナリオベース実習、アンケート、アクティブ・ラーニング、歯学教育

緒 言

歯科医師が生涯学習を継続するうえで、学部教育における問題解決能力の修得は必須である^{1,2)}。中央教育審議会の答申³⁾においても、知識伝達型一方向性の講義から、アクティブ・ラーニングを軸とした教育への質的転換を求めており、歯学教育を「学生が自主的に問い学ぶ」という本来の大学教育の姿へと再構築する必要がある⁴⁾。教育改変の一環として、歯学部・歯科大学では問題基盤型学習 (Problem-Based Learning, 以下PBL) が広く導入されているが^{5,6)}、PBLでは適切な助言で誘導する力量を有するチューターがいないと誤った問題解決へとつながることもある⁷⁾。そのためPBLの有効性が示された現在でも⁸⁾、多くの歯学部・歯科大学では従来の講義スタイルが主流となっている。反転授業の導入例も報告されているが⁹⁾、一般的ではない。

九州歯科大学 (以下、本学) では、歯学科3年次から開始する臨床基礎教育の複数科目で、共通の仮想患者を

想定したシナリオベース実習を導入している。本実習を通して、学生は仮想患者のライフステージに応じた診断・治療を各科目で履修する。最初の臨床基礎教育科目である「歯の治療学」実習では保存修復学・歯内療法学に加えて他科目 (歯冠補綴学、口腔外科学および歯科麻酔学) の一部を組み込み、急性症状を呈する仮想患者の口腔内診査から消炎、保存修復治療と歯内治療、支台築造と暫間補綴処置、メンテナンス時のう蝕リスク検査といった実際の臨床に則したシナリオを構築している。また、歯の治療学では「体験先導型学習」を取り入れている。本科目では学習内容を小テーマに分け、テーマごとに学生は、1) 予習課題の自己学習レポートを提出し、2) シナリオベース実習で体験した後、3) 実習内容に即した講義を受講する。これら数個の小テーマで構成した大テーマの学習終了後、4) 体験した治療技術向上を目的とした定着実習を受講し、5) 知識確認のための小テストを受ける。実習での教員による示説は簡便なものにとどめ、学生は静止画や動画による説明と実習器材や処置法の詳細が記載された実習書 (ノートブック) をもとに実習を進める。

本研究では、2014～2018年度に歯の治療学を履修した学生に実施したアンケート結果を分析し、シナリオペー

九州歯科大学口腔機能学講座口腔保存治療学分野
平成31年4月15日受付
令和元年5月17日受理